

特別講演 1

「白血病治療の進歩」

福井大学医学部 血液・腫瘍内科 講師

山内 高弘 先生

40 年前不治の病であった白血病はいまもなお難治性疾患の代表である。しかしながら、現在白血病の分子病態が徐々に解明された治療法が進み治療成績は確実に向上しつつある。白血病は大きく骨髄性とリンパ性、急性と慢性に分けられ、急性骨髄性白血病、急性リンパ性白血病、慢性骨髄性白血病、慢性リンパ性白血病に 4 大別される。急性白血病では抗がん剤の進歩により 60 歳以下で 5 年生存率は 4~5 割となる。予後不良亜型では骨髄移植を施行する。特殊亜型、急性前骨髄性白血病ではビタミン A とヒ素を用いることで 5 年生存率は 6 割を超える。慢性骨髄性白血病ではその分子病態が解明され分子標的薬グリベックにより 5 年生存率は 9 割を超える。白血病は抗がん剤治療のモデルの一つであり、がん発症のメカニズムの解明ならびにがんの分子異常を標的とする分子標的療法の開発がさらなる治療成績の向上には不可欠である。